

は じ め に

北海道麦作共励会は、今年で38回を数えることとなりました。この間、関係各位の皆様には絶大なるご支援、ご協力をいただいております。ここに、厚くお礼申し上げます。

本年の第1回審査委員会（委員長：北海道農業研究センター川口健太郎作物開発研究領域長）を8月9日に開催し、開催要領、審査基準、推薦調書について検討を行い、本年の北海道麦作共励会の取り組みを決定いたしました。その後、審査委員会の決定を踏まえ、8月21日付けで各地区協会に開催案内を行い、関係機関・団体に、後援依頼と参加推進をお願いしました。

平成29年産の秋まき小麦は、10a当たり収量532kgで前年対比120%と上回り、平均対比116%と平均収量を上回りました。

春まき小麦では、10a当たり収量306kgで前年対比98%、平均対比でも98%と平年収量をやや下回りました。

全道の収穫量は、約61万トン、当初約57万トンの収穫量を見込んでいましたので計画対比107%の収量となりました。作付面積は、約12.2万haで前年対比99%でした。

一方、品質面では秋まき小麦の1等麦比率が約98%となり、平成26・27年並に高く、基幹品種である「きたほなみ」の品質ランク区分は、地域間差はあるもののタンパク含有率を除きクリアできました。

また、春まき小麦では、収穫期間中に断続的な降雨や低温傾向により穂発芽や低アミロの被害を受けた地域がありました。また、7月の高温により急激に登熟が進み細麦となり、1等麦比率では77%となりました。

秋まき小麦の収量が昨年を上回った要因として、融雪が早かったこと、4月以降高温傾向で推移したこと、特に登熟期間が平年より1日長い45日間となったことなどによると思われます。

秋まき小麦では、全道的に平年を上回る作柄となり、関係者の協力で7点の出席となりました。7点の内訳は、第1部（畑地における秋まき小麦）個人で2点、同集団で1点。第2部（水田転換畑における秋まき小麦）個人で1点、同集団で1点。第3部（全道における春播き小麦）個人で2点でした。

11月7日に第2回審査委員会を開き、推薦調書を基に審査を行い、部門毎の賞を選考し、12月5日までに現地調査を行い、正式に各賞を決定いたしました。

本報告書は、最優秀受賞者の麦づくりと経営概要をまとめたものです。作成に当たって、川口審査委員長に審査報告をお願いし、関係地区の審査委員はじめ農業改良普及センター、農協の関係各位に最優秀受賞者の概要をまとめていただきました。本報告書が皆さんの麦づくりや経営改善の一助になることを願っております。

最後になりますが、本年の麦作共励会の実施にあたり、ご協力いただいた関係各位の皆様に対しあらためて心からお礼申し上げます。

平成30年2月15日

一般社団法人 北海道米麦改良協会